

A Japanese translation of Wyndham Lewis's
Anglosaxony: A League that works

MAEDA Shigeru

Wyndham Lewis (1882-1957) has once appeared as a leader of the English avant-garde art movement for his setting up of Vorticist group with young artists and writers including Ezra Pound and launching a magazine *BLAST* with their manifesto in 1914. After a withdrawal into private life for about a decade, he resurrected himself not as an artist but as a critic on Western civilization. In 1931, he came into disfavor with the English people due to his publication of a pamphlet which was supportive for Adolf Hitler and German social nationalism.

An overarching international conference on Marshall McLuhan held in 2011 triggered re-evaluation of Lewis because it revealed his influence on young McLuhan's conception of 'global village' during his evacuation from WW2 to North America. In fact, Lewis had begun to insist on a sort of internationalism or, using his own word, 'universalism' since the beginning of 1940s. How can this political turning be possible, if it was not just an excuse for having been an advocate of Nazism? Or, is there no such tuning from national socialism to globalism? I translated his 1941 pamphlet titled 'Anglosaxony' into Japanese to examine this Lewis's development of thinking.

ウィンダム・ルイス
『Anglosaxony: A League that Works』 翻訳

前田 茂
MAEDA Shigeru

ここに訳出したのは、ウィンダム・パーシー・ルイス (Wyndham Percy Lewis, 1882-1957) が 1941 年に発表した小冊子『アングロサクソン気質：実効性のある同盟関係』(Anglosaxony: A League that Works, Rayerson Press) である。著者のウィンダム・ルイスは、1914 年にエズラ・パウンドら英国の若手の作家・芸術家たちと立ち上げたヴォーティシズム (渦巻き派) とその機関誌である『BLAST』の発刊によって、英国の前衛芸術運動の旗手として一躍有名になった。ところがその直後に最初の長編小説『ブルジョワ・ボヘミアンたち』(Tarr, The Egoist Press, 1918) を出版してすぐ、ルイスは自身が後に回想しているように「自分自身を埋葬」してしまう¹。ルイスが再び舞台に登場するのは、1926 年、英国で大規模なゼネストが起こった年であり、彼はもはや前衛芸術家ではなく政治思想家あるいは文明批評家に姿を変えていた。

1926 年以降、『支配されるための技法』(The Art of Being Ruled, Catto & Windus, 1926)、『時間と西洋人』(Time and Western Man, Catto & Windus, 1927) といった思想的な著作を次々と発表して、ルイスは再び脚光を浴びるようになったのだが、1931 年に発表した小冊子のなかで、アドルフ・ヒトラーを「平和の人 (Man of Peace)」であり、「テュートン人の賞賛すべき粘り強さと屈強さ、知性の鋭さでもって、自らの政治を他人任せにも成り行き任せにもせず、財政という大きな難題に果敢に取り組み、自由のためには危険も厭わないと決意を固めた現代ドイツの成年男子の表現」だと結論づけたことにより不評を買う²。その後、1939 年にルイスは『ヒトラー信奉、そしてそれはいかにして終焉するのか』(The Hitler-Cult and How It Will End, J. M. Dent & Sons, 1939) を発表してナチズムを批判、さらに 1941 年の『アングロ・サクソン気質』へと至るのだが、こうしたルイスの転向が世間の批判を免れるための方便だと単純に言い難いのは、それら三つの著作を通じて、政治体制を民族気質の反映だとするルイスの観点、いわばモンテスキュー風の風土決定論が一貫しているからである。

近年、ルイスの思想が再び注目されている。その背景としては、2010 年にマドリッドで開催された回顧展を組織したポール・エドワーズ氏の長年の尽力により、ルイスの造形活動と思

想的変遷の全体像がおぼろげながらも展望できるようになったことが挙げられよう³。2017年にはイギリス帝国戦争博物館がルイスの業績と戦争の関係を振り返る展覧会を企画している⁴。また、2011年に大規模なマーシャル・マクルーハンに関する国際会議が開催されたなかで、第二次世界大戦中に北米に疎開していたルイスが、若きマクルーハンに及ぼした影響が無視できないものであることが指摘されたことも大きい。ここではマクルーハンの基本概念の一つである「グローバル・ヴィレッジ」が、ルイスの「ビッグ・ヴィレッジ」の概念を発展させたものであることが示唆された⁵。だとすれば、「アドルフ・ヒトラーは極めて典型的なドイツの『民衆の人』に過ぎない」とする立場から、ルイス自身の言葉遣いを引用するなら「普遍主義的な——この世界主義的もしくは国際的な——傾向」へのルイスの思想的転向は、いかにして可能になったのだろうか⁶。

現在、英国ではルイス全集の出版計画が進行中であり、それによって少なくとも英米圏においてはルイス再考の機運がますます高まっていくと予想される一方で、日本におけるこれまでのルイス研究はほとんど文学研究の範疇を出ていない。菅見によれば、日本において出版されたルイスの翻訳は現時点で一つの例外を除いて彼の小説作品に限定されており⁷、先に紹介したような1920年代後半以降の思想的な著作はまったくと言ってよいほど日本には紹介されていないのだが、その理由として考えられるのは、ルイスの文体の難解さである。1973年の論文「未来派としてのウィンダム・ルイス」のなかで、フレデリック・ジェイムソンはルイスの小説作品における文体を「故意に英語特有の慣用表現と英国の口語表現をふんだんに盛り込みつつ、「いくつもの〔中略〕外面の解剖図であるかのような同じ基礎的な感性的推測に沿って進んでいき、何か外的で無限に再分割可能なものとしての現実世界という概念を投影していくのであり、それはまるでドロ잉画家が眼前のどんな対象を再現するにせよ『飽くことを知らないほどの』分量のページを黒く塗りつぶす気構えでいるのと同様である」と特徴づけている⁸。実際、ジェイムソンも挙げている次のような文章を、英語ネイティブでない日本人が完璧に日本語に翻訳することは至難の業であろう⁹——「Pulley has been most terribly helpful and kind there's no use excusing himself Pulley has been most terribly helpful and kind most terribly helpful and he's been kind」。

とはいえ、今日、グローバリズムの進んだヨーロッパにおいてGI (Génération Identitaire) といった若い世代の新右翼が抬頭し、その政治的・文化的な背景が議論されている状況において、ルイスの思想的な変遷をたどることは、日本においても十分に意義のあることだと筆者はかねてから考えていた。幸い、筆者は2018年2月、先に紹介したポール・エドワーズ氏の好意で『アングロサクソン気質』のコピーを入手することができた。「幸い」というのは、この小冊子は上述のルイスの転向の内実を知る上で極めて重要であるにもかかわらず、1941年6

月 30 日にカナダの出版社から 1500 部が公にされた後、1944 年 2 月までに販売されたのは 350 部にすぎず、残部はすべて溶解されてしまったと推測されるからである¹⁰。本来であれば、この小冊子を中心にルイスの思想的変遷を紹介・吟味する論文を執筆するところであるが、筆者の怠慢もあって、論文のかたちに仕上げるまでには至らなかったため、また言い訳にはなるが先述の通りルイスがそもそも日本であまり知られていないこともあって、まずはこれを翻訳して広く日本の読者の目にも触れるようにしたいと考えた次第である。

翻訳に際しては、当時のルイスの考え方を忠実に再現するため、不適切・差別的な表現・語句であっても、そのままのニュアンスを再現する訳文・訳語をあてた。文中の [] 内は訳者による補足であるが、必要最低限にとどめた。また、先に紹介したルイスの文章の手強さのため、訳者は何度もポール・エドワーズ氏に質問をすることになった。そのたびにいただいた親切なアドバイスに感謝したい。

註

- 1 Lewis, *Blasting and Bombardiering*; University of California Press, 1967 (second revised edition, first edition published in 1937), p.4-5.
- 2 Lewis, *Hitler*; Chatto & Windus, 1931, p.201-1.
- 3 Cf. an exhibition catalogue of “Wyndham Lewis (1882-1957) ,” Fundación Juan March, 2010.
- 4 Cf. an exhibition catalogue of “Wyndham Lewis: Life, Art, War,” The Trustie of the Imperial War Museum, 2017.
- 5 とりわけ、cf. Paul Tiessen, ‘Literary Modernists, Canadian Moviegoers and the *New Yorker* Lobby: Reframing McLuhan in *Annie Hall*,’ in Carmen Birkle et al. (eds.) , *McLuhan’s Global Village Today: Transatlantic Perspectives*, Pickering & Chatto, 2014, p.149.
- 6 *Hitler*, p.31; *Anglosaxony*, p.62.
- 7 『The Diabolical Principle and the Dithyrambic Spectator』 (1931 年) : 永松定訳、『悪魔主義』、金星堂、1933 年 (1994 年に大空社より復刻版) ; 『Men without Art』 (1934 年) : 工藤昭雄訳、『芸術をもたぬ人々』、南雲堂、1959 年 (1975 年に同社より改装版) ; 『Tarr』 (1918 年) : 飯田隆昭訳、『ブルジョワ・ボヘミアンたち』、思潮社、上・下巻ともに 1966 年 ; 『The Revenge for Love』 (1937 年) : 中野康司訳、『愛の報い』、『世界の文学 イギリスⅢ』、集英社、1991 年所収 ; 『The French Poodle』 (1916 年) : 今村楯夫訳、『フレンチ・プードル』、井伊順彦編、『世を騒がす嘘つき男 英国モダニズム短編集 2』、風濤社、2014 年所収。
- 8 Frederic Jameson, ‘Wyndham Lewis as Futurist’ in *The Hudson Review*, Vol.26, No.2 (1973) , p.300, 299.

- 9 Lewis, *The Childermass (part1)* , Catto & Windus, 1928, p.50.
- 10 Cf. James Egles, 'Recent Aquisitions: A Rare Wyndham Lewis Pamphlet,' in *The British Library Journal*, Vol.23, No.1 (Spring 1997) , British Library, p.98.

アングロ・サクソン気質——実効性のある同盟関係

1941年

第一部 民主主義とファシズム

第一章 このたびの戦争で旗印となっている諸観念

今日、相対立している二つの原則、あるいは生活様式は、それぞれ「民主主義」と「ファシズム」という名で呼ばれている。大いに不興を買ったために現時点ではそれら二つの背景をうろついている第三の原則があり、それが共産主義である。

この場では共産主義には触れないでおく。ここで私が関心を寄せるのは、この度の戦争において用いられている二つの思想（というのも戦争は武器だけで戦われる訳ではなく思想によっても戦われるから）に限られる。そして共産主義はこれに該当しない。

ここ十年ほどの間、とりわけ「知識人たち」に及ぼした影響という点では、共産主義は我々にとってあまりに多大な役割を演じてきたため、民主主義を支持する陣営においてもファシズムを支持する陣営においても、レーニンの、そしてトロツキーの教えのある部分については、これを時代遅れだなどと断ずることは不可能である。しかし純粹状態では、思うに、我々が近い内に再び共産主義にお目にかかるということはなかりう。さらに全ての実践的な目的にとっては——そしてこのささやかな本の唯一の関心は実践的な政治にある——、民主主義とファシズムこそが問題とすべき二つの生活原理であり、統治原理なのである。

* * * * *

ファシズムとは、共産主義と同様、一つの宗教であり、他方で民主主義はそうではない。これが最初に心に留めておくべきことである。それは重要な違いなのだ。

「宗教」という言葉を定義する必要はあるまい。唯一、言っておかねばならないのは、宗教は政治とは大いに異なる要求を我々に課すということである。宗教とは総じて、単なる政治哲学よりもずっと強力であり、人々にいっそう多くの活力を与えるものである。それゆえ、ファシズムがそうであったように、ある物事がまずは単なる政治哲学として出発し、ついで単なる政治哲学が論理的に要求できる範囲を超えて、身体、魂、さらには全身全霊に対する神秘的な要求へと発展した際には、これを一つの宗教と言い表すのが最もしっくりくる。

共産主義とは実のところキリストなき原始キリスト教であった。しかしながら、このキリストの不在は、共産主義の信奉者たちにはほとんど気づかれることがない。というのも共産主義が宗教的な情動性を利用したのは、つい最近ようやく脱キリスト化した社会においてだったからである。脱キリスト化したとはいえ、その社会は未だに、二千年にわたってその究極の法となっていた情動的な力に満たされていた。

共産主義が私たちに何を要求するのかをしばし思い返してみると、それは（ちょうどキリスト教の拠って立つところがかつて与えていたような）ある種の道徳的な強迫なしには、とうてい存立のかなわないもの、およそ筋の通らないものであることが理解できよう。というのも人間は生まれつき道徳的ではないからである。つまり人間にとって、自分自身より不遇な人々全員に対して情け深くあったり、あるいは他の人々に対して寛容であったり、他の人々とあらゆるものを分かち合ったりというのは自然なことではない。人間とは本来、自分勝手に欲張りなのだ。虎、熊、蟻、野生馬は、「公正」でもなければ「協調的」でもなく、思いやりに溢れている訳でもない。山上の垂訓¹は、たとえそれを聴き取れたとしても、これらの動物にとってはチンプンカンプンであるだろう。

もはや本来の意味ではキリスト教的とは言えないヨーロッパの全ての社会にとっては、明らかに共産主義よりもファシズムの方がはるかに論理的な信条である。なぜならファシズムには「鼻持ちならないキリスト教信仰など一切」存在しないからである。「ジャングルの掟」が神の法に取って代わったのだ。

おそらく、ちょうどかつてのキリスト教的な諸々の衝動が共産主義社会からじわじわと滲み出てきたように、どのような共産主義社会であろうとその社会はファシズム的にならざるを得ないのだ、と述べても間違いではなかろう。いずれにせよ我々はすでに、とある事例の内にそうした進化を目の当たりにしている。つまりソビエト・ロシアの内に。そして、そのような進化が大半の共産主義社会においても予想されねばならないというのは、さして意外でもなかろう。

民主主義者である我々もまた同様に警戒する必要がある。異なる出発点からではあれ、似たような理由から我々もまた同じ——ファシズム的な——方向へと進化するかもしれないのだ。明日の我々がファシストになっていることを望まないのなら、このようにファシズムにとって好都合な倫理的空隙が生み出される条件がどのようなものなのかを極めて念入りに考察した方がよい。

* * * * *

かくしてファシズムとは一種の宗教である。その崇拝の対象は、キリスト教におけるような神ではない。それは、神と比べても途方もなく大きく、壮大な権力を備えており、そしてその信者にとっては、遍在的で広汎な何か、要するに国家（State）である。

国家——国家主義的な国家——は一種の原始的な神である。それは半人半獣の無慈悲な怪物のように、恐れおののくファシストを威圧する。しかし、国家が権力意識に満たされる時——そして権力とはまさに国家を肥大させるものであるからには国家は常にそうになってしまうのだが——、すなわち国家がすっかり身をこわばらせて別の国家に対して唸り声をあげる時には、ファシストの市民は当然のことながら不安でいっぱいになる。というのも、その国家とはいわゆる「全体主義的な」なシステムであり、つまりは彼（この市民）がこの敵意に満ちた存在へと統合されているのだということを理解するにつれ、彼は、国家がその数あるヒステリックな逆上の一つにおいて近隣の別の怪物との戦闘状態に入ってしまうに違いないこと、そして彼自身もまたこの衝突の後で国家が流すだろう血の一滴、もしくは国家が失うだろう何百万もの歯車の一つになってしまうことを悟るからである。戦場に到着する頃までには、彼は少なからず神経質になっている、時には恐怖で我を失っていることは間違いない。

民主主義の地に住まう我々は、国家というものを世話好きの年老いた祖母のように考えることにあまりに慣れてしまっているため（むしろ傍若無人な老女だと判明することもしばしばだとはいえ）、全体主義国家の一市民であることがどんなものかを理解するのが困難になってしまっている。

その構成員である個々人の便宜のために存在する我々の国家のようではない国家、反対に、個々人こそ国家そのもののために生かされているというくらいにまで纏め上げられた国家というものを思い浮かべるのは容易ではない。どんな人間的な性格であろうと鼻で笑って退けるモロク²の姿を想像することなど不可能である。

我々の年老いた祖母のような政府が突如として冷酷になる様子を想像してみよ！ どれほど冷酷になろうと、決してこれほどまでではなかろう。どれほど横暴になったとしても、毫碌して手足の効かない年老いた祖母と、モロクの間には、超えることのできない溝がある。

民主主義的な国（country）の市民であれば、どんなにこの老婦人（政府）のことを多少なりとも好いていたとしても、崇拝するなどということはない。これこそ私が指摘したい論点である。つまり、ある男が自分の妻のことを「崇拝している」と言われることはあっても、祖母のこと崇拝する男など、まず聞いたことがない。英国首相やアメリカの大統領が、ゲルマン民族の「総統」のように崇拝の対象になることなど決してない。

それゆえ宗教的なモチーフに戻ってみよう。ファシストは国家を崇拝する。国家とは、それほどオンボロでもない制度、善意から生まれた制度であり、不完全な世界のただ中で彼のため

にどうかこうにか最善を尽してくれる。定期的に彼の一票を投じることを要求する時以外は、ほとんど注意を払うこともないものである。ファシズム国家はこれとはかなり異なっている。この国家は自らが全知全能だと僭称するのだが、西洋の民主主義において、そうした存在は未だ漠然と何か偉大な超俗的原理に属するもの、日曜日あたりに人々が時間の許す限りその前に赴いてひざまずき、悲しげで熱のこもった賛美歌を歌うものくらいに受け止められている。

しかしファシズムの地にあっては崇拜以外のための曜日などない。『我が闘争』を聖書とする地においては毎日が祭礼日³である。あらゆる場所が一つの広大な「礼拝所」なのである。そして礼拝者たちは（そこに一種の「人格神」がいるからには）アドルフという変わった名前を持ち、申し訳程度に口ひげを生やした小太りの男のもとへと馳せ参じるのである。

国家とは、こうした不毛なカルト崇拜の対象となっているものであり、いずれにせよそれに人格的な表現を提供してきた個人より以上のものであって、つまりは「ドイツ」や「イタリア」と呼ばれている動物の大集団に過ぎない。しかし、こうした類いの崇拜に耽溺することは、雷光や火山、瀑布を崇拜するようなものである。人身供犠はそうしたカルト信仰と不可分である。誰それをそこに投げ入れたり、自分自身が投げ込まれるはめになつたりすることなしに、火山の噴火口を永きにわたって崇拜するのは無理筋である。戦車で単身突撃やシュトゥーカ爆撃機⁴ 単騎による急降下というのは、おおよそこうした野蛮な宗教の一儀礼なのだ。

第二章 平均的なアングロ・サクソン人によって理解される民主主義とそれを批判する人々

先の第一章は、我々の主題に近づくための予備的な章である。いよいよ我々の注意を先の二つの原則、つまり「民主主義」と「ファシズム」に据えて、それらをいわば政治的対象として明瞭に描き出せるかどうか確かめてみよう。これら二つの原則は我々全員と直接に関わっている。ただしその双方の核心に迫ろうとすると、我々がいかに無知であるかと驚かされる。

高校生であれば女子でも男子でもみな、「民主主義」と「ファシズム」らしきものについて、いくらかは意味のある定義を唱えることはできよう。同じく一般人もみな、少し考えを巡らせてみれば、同じことができる。とはいえこれらの定義はどこかあやふやで空疎であるようだ。その理由は、民主主義とファシズムの双方が、物の考え方というよりは物の感じ方（つまり言ってみれば存在の仕方）だからである。一方を他方よりも好むとすれば、それは本能の問題なのだ。

この感情的な不分明さゆえに、民主主義者は自分自身への説明が求められる。彼はなぜ自分が民主主義者なのかが自らに対して説明されていることを要求するのである。少なくとも絶対に必要ないということではなければ、こうした時節にそれを行なっておくのも悪いことではない。ファシストもまた、自分に対して「なぜ自分がファシストなのかが」明白であることを欲して

いる。それはファシストが自分について考えたいと思うからではなく、ただ自分のことを感じていたいと思うからである。

平均的な民主主義者の男であれば、ファシストが「なぜ彼がファシストなのかを」説明してくれなくても結構だと反論するかもしれない。ファシストが何者であるかは、ファシストが何をするのかによってかなり十分に説明される。そのことの内には大いに真実が含まれている。ここ最近の世界で起こってきたことは、それだけで何事かを明らかにしているのだ。しかし(もしこれといった理由もなく)自分自身のことを知ろうとするなら、他の人々のことを、とりわけその心のありようが自分のそれと食い違い、脅威となっているような人々のことを、いっそうよく見極めることが肝要である。

民主主義者には、自分の先入観の基礎をなしている諸々の仮定が明るみに出され、それがファシストの先入観の基礎をなしているそれと引き比べられた上で、自らの自信のなさを払拭するという経験が必要である。民主主義というものは、ややもすると不確かで混乱したその輪郭線が暗示するよりもはるかに堅牢なのだ。

そこで、平均的な教育を受けた民主主義者が民主主義とファシズムのことをそれぞれ定義するよう求められたと仮定して、彼はどんな答えに辿り着くだろう。彼の言う定義はおおむね次のようなものになるだろう。

第一に、民主主義の共同体においては、最も貧しい者でも投票の権利を行使できる。彼は(仲間の選挙民とともに)人気のない大臣を役職から追い出すために投票し、そして自身の願望を取り上げてくれる政治家へと投票することができる。他方でファシストの地では、普通選挙権も選挙で選ばれた政府も存在しない。政治的な無鉄砲者の一団が権力を掌握する。つまりこの一団は、自分たちの直接の支持者以外であれば有権者だろうと誰だろうと気にかけることなく、検証されることも異議を唱えられることもないまま統治を行う。以上が、独裁主義的な(あるいはファシズムの)国家と自由な議会制民主主義との間の主要な構造上の違いである。

次に出版の自由、集会の自由がある。ここにもまた、民主主義的な自由にとっての二つの主要な大黒柱がある。(理論的には)好きに選んだ事柄に関するニュースを広く知らせ、望みのままに時事的な事柄に関する見解を表明できる出版社を民主主義者は有している。その誠実さが制限されるとすれば、特定の政党との結びつきによるほかない(それゆえ、保守的であるならその新聞はリベラルな対抗勢力については真実を常には伝えないだろうし、その逆もまた然りである)。事実上は、新聞の購読者がその新聞の自由度を制限しているのである。しかし新聞はどんな政府であれ思う存分に攻撃することができる。よって、常に非の打ちどころのない誠実度を手に入れている訳ではないにせよ、少なくとも我々は自由なギブアンドテイクの関係を享受している。

集会の自由について言えば、我々はみな公園や広場で演説を聴いてきたし、あるいは街頭演説の巧みな弁舌を耳にしてきた。全体主義的な国においてなら、そうした演説や弁舌のゆえに彼らは処刑される羽目になっただろう。

反対に民主主義者はあらゆる所有物の中でも最も貴重な人身保護の権利を有している。彼は陪審裁判を受ける権利を有している。これらの特権は成年選挙権よりはるかに重要である。全体主義的な地にあつては、誰であろうと裁判も近親者への説明もなしに拘束され投獄される可能性がある。彼にとっては戒厳令下にあることが日常なのだ。

ファシストにとっては、自分の主人が持っているだろうと彼が考える意見に対立するような意見を表明することなど思いもよらない。そして、不注意さによると間抜けさによるとにかかわらず、彼が何か正統であろうと信じることを発言したとして、しかし実際にはそれが不穏当な発言と見なされるものであることが判明したならば、どっちにせよ彼は破滅させられてしまう（例えば全体主義的なジャーナリストの生涯は終わりのない不幸である、というのも彼はしばしば自分の主人が彼に何を求めているのかを推量せねばならず、そして彼はしばしば間違った推量をするはずだからだ！）。

* * * * *

平均的な民主主義者の男が、なぜ自分はかくも熱心に民主主義に対して忠誠を誓うのか、そしてなぜ同じくらいの情熱を傾けてファシズムを拒絶するのかについて説明しようとするれば、だいたい以上になるだろう。民主主義国家において、アングロ・サクソンの自由な社会にあつては、集団的自由にほとんど関心を払わず、自らの不自由なやり方を他の人々にも度を超えて強要したがる国民の一群と対面すると、大衆心理の内に一つのイメージが自ずと出来上がる。このイメージはおおむね正しい。私はそれが事実だと思うし、おそらく読者もそう思うだろう。しかし、もちろんのことながら、我々の自由なアングロ・サクソンの共同体に属しつつ、これとは異なる見解を持つ人々も多数いる。我々は、自分たちと違うからといってこうした人々を強制収容所に送ったりはしない、というのはついでながらここに記しておいてもよからう。とはいえ、これら無視できない数の別意見の人物たち——つまり民主主義のただ中にいる反民主主義者たち——については、ここで長めの脱線をしてでも取り上げざるをえない。

こうした反体制派は主として過激な労働者団体や知識人の間に見出される。この、しばしば正直ですらある少数派の見解を無視するのは浅はかであろうし、愚かなことでもあろう。まずは私が擁護している体制に対するこの根強い告発を可能なかぎり退け、いっそう合理的な基盤に立脚することなしには、ここでの議論を先には進められなかった。

我々の中にいる反体制派は次のように主張することだろう。曰く、「実際のところ民主主義とはたんに金権主義の不都合な真実を隠蔽するための魅力的な標語なのであって、本当のところはこの金権主義こそが我々の体制なのだ」。

彼らは次のように反論することだろう。すなわち、我々が大いに自慢している「自由な」出版社は資本家の手の内にあり、民衆に対して、資本主義体制が彼ら民衆に備えて欲しいと望んでいる見解と心の持ちようを、優しく飲み込ませているのだ、と。その主張によれば（公園や街角での演説といった）「言論の自由」とは、富を所有する階級が大衆に自由の幻想を抱かせるためのまやかしに過ぎない。自らの考えを述べる特権を行使できるというのが大いに自慢だとして、この特権を活用したばかりに他よりも不当な扱いを受けて餓死してしまうのであれば、それが一体何だというのか、と彼らは問うだろう。

陪審裁判を受ける権利について（反体制派の言い分を引き続きまとめつつ）言えば、そしてその他全ての法的な手続きにしても、もしそのように施行されている法律が、有産階級によって彼らの保身のために策定された法律だとすれば、それを行使したところで何だというのか。「金持ちの法律と貧乏人の法律は別」とも言うのだから——つまり裕福であればたいいの法律は大目に見てもらえるのだから——、どうして民主主義的な「正義」についてあれこれ無駄話などするのか。そしてこれらの批判者たちが法律について話を終える時までには手付かずのまま残されているのは、およそ人身保護の権利だけということになり、それすら生き残りをかけて支配階級が「非常事態」を宣言した瞬間には失効してしまい、そして支配階級の決定次第で、一般市民自身のためには——つまり「公共の利益のために」は——己が享受している特権をいわば「自由な」主体として断念せねばならないと告知されるのではないか。

民主主義体制に対するこれら破壊的な批判者の話をこれ以上続ける必要はない。彼らの言い分は平均的な姿勢を代表してはいない。実際のところ、彼らが代表しているのは、どんな場合でも全体からすればあまりに少数の人間たちの考え方である。なので、たとえ我々が彼らのことを無視するには忍びなく思うとしても——そしてこうした類いの概説において反正統派の見解についてわずかでも説明せずにすませるのはおよそ不可能だとしても——、先に行なったように反民主主義の論点を概観し、そしてこれからするようにこの論点に回答を与えてしまえば、平均的な考え方と感じ方、つまり我々の国においては「民主主義的な流儀」、と呼ばれているものに関する論点を再開してもよからう。

第三章 民主主義を批判する人々への回答

先の章で素描したような、いわば民主主義に対する正面総攻撃への最良の回答法とはどのようなものだろう。というのも、すでに述べたように、これらの攻撃に決着をつけてしまわない

限り、我々は民主主義について議論する作業を進められないからだ。

最初に、我々を批判する者たちを過小評価するという間違いは犯すまい。彼らはむしろ極めて正直で、きわめて賢明かもしれないのだ。彼らがアングロ・サクソン人であるなら、彼らこそほとんど我々以上に自由を愛しているかもしれないのだ。むしろ彼らは自由を愛していないどころか愛し過ぎているのかもしれない。彼らは自由をあまりに強く抱きしめてしまって自由を絞め殺しているのかもしれない。おそらくレーニンはそうであった。

ところで、民主主義に対する破壊的な総攻撃が美しいほどに簡明であるのはむしろ不幸なことである。それは極めて簡明であり、どんな子どもでも理解できるのだが、[それに対する]唯一の間違いなく有効な回答の方はいささか複雑である。その繊細さはどうやら子どもには、もちろん場合によっては多くの平均的な人間にとっても、込み入っているように思えてしまう。

それだから、これから私が提出する回答を読んで分かりづらかったとしても、どうか非難しないでほしい。これはあの「攻めるは易く守るは難し」という事例の一つなのだ。

物事をぶち壊しにするのはどんな愚か者でも簡単にできる一方で、それを元通りにするにはずっと賢い人間が必要であるということが、いかに何度も観察されてきたことか！ そういう訳で、民主主義を立派に組み立てるとするのは、それに敵対する立場からこれを打ち壊すほどには容易いことではない。

まずは民主主義が脆いものだと認めることから始めよう。民主主義を擁護するための第一歩とは、民主主義者が当たり前と考えている自由などありえないものなのだと認めることである。

おそらく民主主義などというものは存在しない。もちろん我々が常日頃「民主主義」と呼びならわしてきたものは確かに極めて良いものではあるが。そこで、自由などというものは事実上ありはしないのだと大胆に認めることによって、民主主義を批判する者たちへの反撃を開始しよう。自由というのは極めて相対的な言葉であって、文字通りに受け取ってしまうと完全に意味を失ってしまう。そのことを認めたからといって運命論者になる必要もない。

いかなる理想的もしくは理論的な意味においても人生を通じて自由な者などいない。我々の生存条件だけとってみても、不死ならざる者として極めて制限された我々の行動範囲、我々の寿命の短さ、小さな惑星に住まう小さな動物としての限界、感情や気分への隷属、日々生じる動物的な欲求など、これらのことはみな、我々が「自由な行為者」の称号を獲得するには極めて貧相な候補者であることを意味している。

しかし、我々をして「自由な」体制に愛想を尽かすよう仕向ける理論家に抗するための極めて堅固な防衛ラインの概要であれば、ここにすぐ示すことができる。というのも、この理論家が我々の「自由な」体制に代えて何か非の打ちどころなく自由なものを取り替えられるかと言えば、それなりに知的な人物あれば誰しも疑わしいと間違いなく思うはずだからだ。

たとえ難解には違いないとしても、いくつかの観点からならすぐにこの回答は理解できる。回りくどい言い方はせずに（なぜなら批判家に対してはそれと同じくらい端的であるのが最善であるから）、次のように述べねばならない。すなわち、人間社会は自然界と同様に「弱肉強食」であり、ただそれはコントロールされ秩序づけられている——あるいはこう言ってよければ手なづけられている——だけのことなのだ。人間社会は蟻と同じようなパターンにはめ込まれており、我々は個別どんな蟻もそうであるのと同じくらいこのパターンに束縛されている。

さきほど私はキリスト教精神の表立って現れることのない影響について語ったばかりだが、それは未だに我々全員の物の感じ方や振る舞い方に影を落としている。しかしキリスト教精神とは非動物的な（さもなければ反動物的な）理想であるのだから、平均的な男女というのはまさに半キリスト教徒に過ぎなかった。

結果として、我々が論破せねばならない敵対的な類いの批判は、間違った仮定を起点としているように思える。要するにそれは、人類全体の大きい平均値（理想主義的な少数派との競合関係においても、あるいはこの少数派との協調関係にあっても、何はなくとも数にだけは物を言わせて常に筆頭に上がり、そして信心深い人物と同じくらいに、革新的な一派をも当惑させる九割の人々）は、有史以来の六千年かそこらにわたって示されてきたより以上に、感情的になったりすることなく高度に合理的な反応が可能だとする仮定である。この間違った仮定は、ニーチェの「超人」思想の基底にも、そしてレーニンの革命への熱情の背景にも同じ程度にあったものである。

これまで数多くの思想家たちが——それこそ長い列をなして——《人間らしさ (Humanity)》というものに言い寄ってきたものの、この《人間らしさ》というのは年増の浮気女——年増の老獪な浮気女——であり、言い寄られるたびごとに彼女は、時には火傷も負いながら、別の思想家に心移りしてしまう。とはいえ最後にはいつも彼女が期待に応えられないか、あるいは思想家の方がやり込められてしまうかして、彼女がいつとき受け入れていた思想家の体系は覆されてしまう。彼女は常に初恋の相手、彼の生き方のもとに立ち戻ってしまう。その初恋の相手が誰それだからということでない。実のところ彼は極めて《土より出でて土に還る》類いの[野卑な]男だったのである。この点については否定し難い証言がある。

かつて[彼女に]最も歩み寄った雄弁家、あるいは彼が創始した体系でさえ、十年かそこらしか持ちこたえなかった。そこで我々はみな平均値へと再び戻ってくる。フランスの思想家[アルフォンス・カー]が——明らかにこの年増の淑女に拒絶されたか捨てられたかして——あの有名なフレーズを残したのは、言うまでもなく以上の理由からである。曰く、「表面ハ変ワツテモ中身ハ相変ワラズ」。

今日、我々は極端な反動の時代を過ごしており、そこで《人間らしさ》はかつてないほどだった強烈なほせ上がりの一つを「やり過ぎた」ばかりである。我々はあまりに激しい方向転換を彼女に促すつもりはない。他方で、ここしばらくの間は、これ以上のどんな極端な試みも退けられるほどの決然とした平常心以外には、彼女に何を期待しても無駄であろう。

このたびの戦争が彼女にどのような影響を及ぼすかは神のみぞ知るところである。しかし戦争が決着する頃には、彼女はかなりくたびれた老女になっており、火遊びをしようという気も失せていることだろう。彼女の診察医である我々は、平和という侮りがたい任務に見合う程度の活発さにまで彼女を刺激するだけで手一杯ということになる。

第四章 民主主義を批判する人々への回答（続き）

実践的なことへの信仰を創り出そう——これこそが我々の時代に向けて書かれたこの小冊子における私の原則的な論点である。理論を控え目にしつつ、完璧さを謳う助言に眉を顰めながら、むしろ危なっかしい事件を担当する弁護士と同じくらい慎重になろう。それらの理論や助言はひたすら目眩ましの魅惑と混ざり合っていて、いささか飾り気に欠けた、かなり実効性の高い図式をやり込めてしまうのだから。

なかんずく、死すべき存在に期待できる以上に我々が道徳的でかつ理性的であるはずだと自負することは控えるようにしよう。これらの点で我々が今ある以上に優れて〔道徳心と理性を〕備えていると仮定することによって、しばしば我々は社会を破滅へと至らせてきた。そして間違いなく、我々が経験したばかりの四半世紀にもまして非現実的で真実味に欠ける四半世紀など、我々はとうてい克服できないだろう。

しかしながら、完璧な社会についての見取り図とともに理論家が唱える桃源郷に——常識というものを持ち出して——背を向けてしまう前に、我々はそうした理想郷を忘却してしまうほど徹底して愚かであるべきではないと言わせてほしい。この理想郷は、大勢の名もなき野心家たち（労働者については恐竜についてほどしか、あるいはドイツ皇帝が使い捨ての兵士に寄せるほどしか関心を寄せない連中）にとっては、ここ最近楽しい遊戯場であり続けたのであり、いずれにせよそれは、信心深い連中と哲学者たちにとっての故郷もしくは密会場所なのである。そうした場所へ集団移住することなど実現不可能であると我々が認めざるをえないとしても、それをすっかり忘れてしまうことがないようにしよう。

* * * * *

現実——この数ページにおいて我々が独断的に立脚点としている場所——に立ち返ってみれば、民主主義の国々において、我々は一つの体系を確かに享受しており、この体系は、そうしたものの常として、非常に優れている。こうした主張ですらかなり謙虚に聞こえる。しかし時には謙虚になっても悪いことではない。

どんなに低く見積もっても、民主主義とは、それについて深く考えることがなければ、他のいかなる体系と取り替えるにしても極めて軽率であるような体系である。そして我々がそれについて十分に考えたとしても、民主主義を何か別のものと差し替えるべきでは決してないし、たとえ我々が注意深く磨きをかけるつもりであっても、誰か別の者が我々のためだとして民主主義を手放そうとするのを決して許すべきではない。

完璧な民主主義に最も近づいてみたところで、そこには当然のことながら、マイノリティに対する差別——肌の色が違っているとか、信ずる宗教があまりに古かったり、あまりに新しかったりとかいった理由にもとづいた差別——が見出されることになろう。もちろん、そうした差別は公的には望ましくないことと見なされ、そう見なされる程度には阻止されている。

同じく当然のことながら、民主主義的な法体系であっても、大金持ちによる影響から無縁ではない。しかし少なくとも法体系は存在する。そこには「公正明大性」と不偏不党性が高らかに謳われている。そしてまさにこの平等とフェアプレイの形式こそが、ある程度までの正義を担保しており、事実上、他のいかなる社会において得られるよりも多くのことを担保している。

* * * * *

我々はすでに民主主義的な体制について不利となるかに見える点を認めてきた。これにいくつかのことを追加しておこう。このように不利な点も認めておくことによって、批判者に対処するための最も有効な手立てを獲得することができる。というのは、自分が差配できる材料は全て使えるようにして、合理的に成功の見込みのある代替案を用意しておくためでないなら、このように欠点をあげつらうことなどおよそ無意味だからだ。この場合の材料とは人間本性のことである。

ここで私は民主主義をいっそう擁護するために最古の心理学者たちの技法を活用することを提案したい。私が言わんとしているのは《Als Ob [ドイツ語の「あたかも」]》あるいは《あたかも》の技法のことである。

伝統的な心理学は——端的に言えば——その信奉者に一種の演技であるような振る舞いを強いていた。彼ら信奉者たちは、あたかも一切のことが自分らにとって完璧に上手くいっているかのように振る舞わねばならず、そして一切のことは上手くいくようになったのである。元氣

に振る舞え、さすれば元気になる。朝、浴室で口笛を吹く、さすれば気分も晴れ、一日を始める最良の方法となる。足取りを軽くしてみよう、にこやかで悩みのない様子で振る舞ってみよう、屈託のない雰囲気を通りを闊歩してみよう——、さすれば沈んだ気分を追い散らし、たちまち楽観主義を振りまくようになり、最高の気分になれるだろう。

この原理は我々がここで論じていることにも当てはまる。民主主義とは優れた心理学である。それは我々を助けて、民主主義の原則を遵守するに際しては詐称者もしくは偽善者でなければならないということを否定させてくれる。その仕組みを説明しよう。

民主主義においては、朝から晩まで、我々が「公正明大」で、しかも平等で自由であるふりをするという事実は、すでにフェアプレイと正義への絶対的かつ率直な軽視に対する極めて重要なセーフガードである。我々は努めて公正な人間であるかに見せる。我々は、たとえそうでない時にも、クリケットの試合をしているかのように行動しようとするのである。

これでもまだ極めて及び腰のアプローチに見えるかも知れない。もしあなたが白黒はっきりつけてでしか物事に納得しない連中の一人であるなら、これでは敵に対してあまりに多くの陣地を手放しているように見えるに違いない。

しかし思うにそれは間違いである。遺憾ながら自然というものは決して漆黑であることも純白であることもない。自然は常に二つの間にある明暗の度合いである。黒ならびに白といった絶対値は理論家や夢想家の頭の中にしか実在しない。偉大な彩色家であるティツィアーノは次のように述べたと伝えられている。すなわち、「色彩に汚れを加えなさい」。これはつまり自然の純粹ならざる核心にいつそう近づくためである。

* * * * *

ここまで西洋の年長の心理学者たち——すなわち [ウィリアム・] ジェイムズと [ジョン・] デューイの著書から数ページを抜粋してきた。次に私が証言台に呼んでみたいのは、伝統的な中国文化の解説者たち、あるいはむしろ日本——というのもその文化は日本において今日まで生き残っており、我々全員が偶然出会った日本人にそれを観察することができるから——の儀礼的な文化の解説者たちである。

日本語には、私が理解している限りでは、「I」にあたる人称代名詞がない。教養ある日本人の非人称性は最も際立った目印である。そして日本人の言葉遣いにおいてもまた、我々ヨーロッパの談話においてはあれほど重要な役割を演じている「I」と「me」が欠如していることから、この非人称性が証明される。

我々ヨーロッパ人であれば「私はこの劣悪な建物にはうんざりだ。一度、別のアパートを探

してみるつもりだ」と言うところを、この極東の男は次のように言う。すなわち、「遺憾ながら小生はこの卑しい身を隠すために別の屋根を探してみることになるでしょう」。

おそらく私の日本語についての知識は読者以上のものではなかろう。とはいえ日本語というのは多かれ少なかれ上記のとおりであると私は教えられた。「私は探してみる云々」という代わりに、日本人は「誰かが探すことになろう云々」と言うだろう。それにより、(彼が) 過度に傲慢になること、そして人称の「I」が避けられるのである。

この言葉遣いの謙虚さ、西洋人の「俺は偉い」型の話し方からの自己消去と萎縮は、ここで取り上げている東洋人がその自我の欲求に耳を貸したり、手強い商談をまとめたり、列車の車内で一番よい席を確保できるよう気を回したりすることを妨げている訳ではない。しかしそれにもかかわらず、これら外見上の礼儀正しさと自己否定の形式については一考の余地がある。彼らは近代日本ですら礼儀正しさの模範へと作り上げており、少なくとも態度においては謙虚で、かつ傲慢なところがない。これは何でもないことではない。

どこか似たような仕方で、山上の垂訓に対する口先ばかりの信心——日曜日になると「他の類も向けよ」や「人々にしてほしいと、あなたがたの望むことを、人々にもそのとおりにせよ」といった神命に専心すること——は、かつてのキリスト教徒たちの振る舞いにやはり何がしかの影響を与えていた。それはどんなに穏当で不完全だったとしても、わがままだったり仕返しを望んだりする気持ちを押さえ込んでいた。結局はそれが自制と慈善を生み出していたのである。

* * * * *

どうだろうか。以上が、全体主義者に攻撃された民主主義者に対して私が推奨する類いのアプローチである。民主主義は社会的な平等ならびに正義の遵守を要求するがゆえに、そういったものを実現するための重要な第一歩であるという私の主張を立証するには、長い遠回りに見えたかも知れない。我々が、かつて社会正義や真の平等といったものが人間社会において実現されたなどとは信じない程度に現実主義者であるなら——あえて言わねばならないとすれば我々がそんなことを信じるほどの間抜けでなければ——、少なくとも以上のような手順と主張はいかなる社会であろうと踏み出さねばならなかった大きな一歩なのである。

このような寛容と理屈上の平等という枠組みが民主主義の提供により実在しているということで、たとえ最悪の場合でも正しい方向へと前進できる可能性はまだ残されている。他方で全体主義はこの可能性を永久に閉ざしてしまう。全体主義は「寛容と理屈上の平等という」これらのものを誤ったもの、実現不可能なもの、さらには望ましくもないものとして扱う。それに

より我々は再び弱肉強食の時代に投げ返されてしまうのである。確かに全体主義は見せかけを一掃してくれる。しかし本当に我々は見せかけが一掃されることを望んでいるのだろうか。私にはそのようには思えない。聖人にしか望みえないほどの倫理的情熱が我々自身にも可能だと想定しない程度の見せかけであれば、ほどほどの幻想というのは優れた事柄なのである。

公衆の精神において全体主義もしくはファシズムに帰属する一般概念——二つ前の章での主題に立ち戻るなら——とは、権力へのカルト信仰、身体に無理強いを課すことに対するカルト信仰である。これは紛れもない事実である。このことが、ヒトラー政治だけでなくドイツ皇帝政治をも特徴づけている。そして、こんな具合に各自のすべきことが定められることに対して、こちらアングロ・サクソンの側では1914年にそうだったのと同じくらいに今日の人々を憤慨させている。というのも民主主義がただの見せかけだとしても、こちらの人々は喜んでそのように見せかけているからである。あらゆる見せかけを廃止すること、つまり一切のマナーを捨て去ることによって得られるものは何もなく、多くが失われてしまうと分かっている程度の良識を、この人々は持っている。

「マナーが人を作る」⁵というのは我々イングランドの偉大な学派の一つがモットーにしているものである。(ちょうど共産主義の理論家が課しているように) もともと不可能なのに無私のふりをしてみたり、ファシストや国家社会主義者が唱導するように教養ある物腰と見せかけを一切拒絶してみたりすることは、いずれもアングロ・サクソン人の気風には訴えてこないのである。

* * * * *

九割九分の民主主義者が彼ら自身とその敵どもの間にある違いについて言葉で表現できていることを要約してみたなら、それは極めてわずかなことであるだろう。しかし言葉が全てではない。彼らが上記の違いをうまく説明できるかどうかにかかわらず、この違いには人間にとって計り知れないほどの重要性が関わっており、そして日々ますますこの違いが際立ってきている以上、政治活動にとっての基盤としては現状でおよそ十分なのである。

独裁者たちに抗して飛行機を飛ばしたり、あるいは戦艦に人員を配置するのを補助できたりする者が、自分はそのことについて多くを知っているかどうか知らな過ぎると気に病む必要はない。

活動にとっては、これで十分である。他方で思想にとっては、あまり十分とは言えない。そこで以降のページにおいては、現下の世界における抗争の根本にあるドクトリンについての一般知識に対して、私なりに貢献できるものを付け加えるつもりである。

しかし何をおいても強調しておきたいのは、民主主義がそれ自体としては完結しておらず、その文脈を離れては貧相なものでもありうる、ということである。民主主義をその背景から切り離して検証することは不可能であり、客観的な吟味にも耐ええない。民主主義をそのような仕方で見べきではない。民主主義はそういった類いのものではないのだ。

彫刻家の技芸を例にとりて説明してみよう。民主主義というのは、どちらかといえばインドの山岳寺院にある彫刻群の一つみたいなものであって、それは洞窟の壁面から削り出されているものの、もともとそれが内包されていた素地から完全には削り出されていない。

民主主義もこのような具合であり、ギリシアの古代遺物の彫刻——大理石でできた男女——に対しては本物の人間に対してと同様にその周囲を歩いて一周でき、そしてきれいに梱包され、それが鑑賞・称賛されることになるどこか別の場所へと輸送されて、もともとあった場所やそれが最初に収蔵されていた建物とは切り離されうるのとは違っている。

我々一般人が理解している民主主義とは、何か別のもの——少しも政治的でない何か——の一部に過ぎない。実際、他の観点は別にして、この点では、共産主義と同様に、我々のものであるような民主主義は（たとえ民主主義者の九割がたにおいてキリスト教は明らかに死に絶えて忘れ去られているとしても）キリスト教から切り離しては何の現実味もなく、それは民主主義のいたるところに——[かたどりのために民主主義が中に収まっていた]石膏のようにではなく——それを切り出してかたどったところの、ただし完全には切り離される予定はない岩のように付着しているのである。

もちろんキリスト教は、民主主義にとっての唯一の条件ではない。しかし他の世界の住人某によって突然にそれ自体として出現したというのであれば、民主主義はほとんど無意味なものになろう。例えば先に論じた陪審裁判を受ける権利がうまく機能するかどうかは、特別な種類の「善良なる十二人と真実」次第である。頭の固い保守党と将来有望な自由党、あるいは民主党と共和党といった二党制は、極めて特別な類いの背景を前提としている。人身保護の権利それ自体は、正義についての広く行き渡った基準を自明のものと仮定しており、この基準なしには最も重要な司法令状ですら[その文言が書かれている]紙切れほどの価値もないだろう。

民主主義の成否は、それとは別の、政治とは異なる事柄にかかっている。もちろん事柄そのものは政治的であって、それ以外の何ものでもない。それは宗教ではない。それは特定の知識人に端を発するものでもない。そして、その民族的、地理的、年代学的な背景を見失わないという限りでなら、我々がそれ自体として議論できる程度の独立性くらいは、民主主義は十分に備えているのである。

第五章 とりわけ民主主義のための最良の論拠

先に私は民主主義とは政治的な体系であると述べた。それなのになぜ議会制民主主義が極めて厳密な定義には馴染まないのかといえば、それは議会制民主主義が、政治哲学というよりはむしろ樹木のような、あるいは土壌や気候のような自然現象だからである。その体系は個性的であり、おおよそ非常に有名で広く名の知られた何某のよく知られた癖のようなものである。おそらくこの体系は非常に有名な人々の属性であって、なぜならそれは他の国々では取り立ててうまく機能するようには思えないからである。

良かれ悪しかれ——そして好むと好まざるとにかかわらず——民主主義はアングロ・サクソンの的である。民主主義者がアングロ・サクソンのだと言うのは、おそらく、完全には真実でないだろうが、作業上の定義として用いる分にはかなり真実に近づいていよう。アングロ・サクソン人は、そのあらゆる長所と短所も含めて、間違いなく議会制民主主義に反映している。

我々——このたびの大戦に自らの自由を賭して参戦している我々——が理解している意味での民主主義者であるということは、アングロ・サクソンのになるということである。このように思い切って表明した上で、そのなりゆきを見よう。

我々の戦いの大義となっているこの偉大な原則は輸出不可能である。このことはたびたび立証されてきた。ある意味で我々こそが我々の政治的原則なのである。ルイ十四世が「朕は国家なり」と言えたのなら、我々は「我々こそは自由なり」と言うこともできるだろう。そして「自由」という言葉によって、我々はドン・キホーテの夢想する世界に属するようなものではなく、何か実体のある実現可能な事柄を意味するようにすべきである。

次に続くのは以下のことである。すなわち、もし我々が個人的にも集団的にも大勢の「やくざ者」であり「悪党」であるなら——つまりもし我々が横柄で自己中心的で信用に値せず冷淡であるなら——、民主主義は決して良いものにはならず、我々はみなこれ以上の骨折りはやめてしまって共産主義者かファシストになった方がましであろう。

民主主義とはたんにアングロ・サクソンの人々の、そしてこの人々の伝統的な身の処し方の名称なのである。こうした過度の単純化は、そのままよしとするなら、自由とは何であるかと引き続き詮索することを免除してくれる。行動する人、つまり独裁者たちに抗して飛行機を飛ばしたり戦艦に人員配置したりする人にとっては、人身保護の権利について思い悩むことすら必要ない。次のように宣言しさえすればよいのである。すなわち、「我こそは自由の表現なり」と。これは「Je suis Romain — je suis humain」、つまり「我はローマ人であり、よって人間である」にも匹敵する絶対定式であろう。

そして私が——かつて実際に経験したように——列車の車両の中で我々の海軍所属の水兵た

ちの一团に混ざって、屈託なく恐れを知らぬ彼らの顔つきを目にし、その存在の核心から発する忍耐力と善良さを感じ取った時には、私個人としては先のような民主主義の表明〔我々こそは自由なり〕に、そしてそれこそが何かアングロ・サクソンのなものであったこと、それこそが我々と生死を共にするはずのものであることに、完全な満足を感じるだろう。

こうした具体的な表現は数巻に及ぶ教義書以上に私を満足させるはずのものである。そして、これらの男たちの顔を注視することの内に、私は、イギリス人として、自分の大義が良きものであることを知るべきなのだ。というのも、私は世界の多くの地域を旅したことがあり、数多くの異なった種類の人々（その各々が、アトラス山脈の部族民からメキシコの日雇い労働者に至るまで、否応なく何らかの政治的原則の表現であった）を目にし、そして、先に言及した列車の車両にいた船乗りたち（彼らは沈没した駆逐艦の乗船員の生き残りだった）の人格の内に見出した大義ほどの人間的で優れた大義が自立しているところなど見たことがなかったからである！

しかし我々自身についてももう少し別の仕方で説明を加えねばなるまい。ついさっき行なった事例のように人類から選び出したいくつかの標本を前面に出してきて、「これこそ我々の生きる道だ」とか「これが我々の理解する自由だ」と述べるというより以上に論理的に精緻な説明でなければ、まるで一人の哲学者が演台に登場して、目当ての人物を指差しながら「これこそが真実である！」と宣言したきり放っておくようなものである。たとえその哲学者が大いに的を射ているとしても、結局は風変わりな変人と同じことになるだろう。

確かにフリードリヒ・ニーチェがそうした「対人論証家」⁶であったがゆえに責めを負うべきというのは正しい。彼の主張するところによれば、ソクラテスはサテュロス神の顔をただいみじみに持っていたのではない。ソクラテスの顔は醜く歪んでおり、それゆえに彼の哲学はまづいのだ、と。しかし、こうした「お前はどうかんだ」タイプの論証は極めて適切に封じ込められる。

おそらく平時でなら（平和のことをなお平時下と言ってよいなら）、我々は民主主義に関しては「なりゆきまかせにしておく」だろうし、「我々が民主主義だからって何だっていうんだ！」と言うだろう。しかし戦時下においてはずっと特別でなければならない。我々はもっと多くの言葉を費やさなければならないのである。というのも近代の戦争とは、爆弾と砲弾の戦争であるのと同じくらいに言葉の戦争だからだ。我々は自身の政治的な信念を表わす定型句を見つけなければならない。しかしながら、重要なのは我々の信念の方であって、我々の最良の論拠が常に我々自身でなければならない、ということは決して忘れてはならない。

第六章 十九世紀の好戦的民主主義と古代ギリシア風の民主主義の比較

前章の流れの中で、私は次のように言い添えておいた。すなわち、アトラス山脈の部族民やメキシコの日雇い労働者——同じことは日本人、ユダヤ人、トルコ人、中国人など、お好みのままの他の種類の人間にも当てはまるのだが——は、「否応なくなんらかの政治的原則の表現」である、と。「否応なく」という言葉の含意は明らかである。それが含意しているのは、政治というものは、なんらかの共同体、さもなくばポリス〔古代ギリシアの都市国家〕によって作り上げられて、この共同体を構成する個別の市民らの関係性を調整し、この市民らによってほとんど身体的な癖として押印されている社会体系のことでなければ何なのか、ということである。

アングロ・サクソン人とその体系——民主主義と呼ばれているもの——に当てはまることは、他の人間集団に属している体系にも当てはまる。その集団がアングロ・サクソンの集団と同様に強大であるなら、ちょうど民主主義の理念がそうであったように、その政治的な専売特許品も広く普及させられる。

我々はここ二十年間、絶対主義的な気運の時代を経験したばかりである。我々は再びこの時代に逆戻りするかも知れない。しかしどちらかと言えば、慎重に考え抜かれた上での多様なタイプの政治的信念が獲得されるということになりそうである。

先立つ章で指摘しておいたように、世界社会主義、あるいは（「ピンク色」に薄められた形での）共産主義が、先の大戦終結以来、ヨーロッパ人とアメリカ人を支配してきた。そしてそれは、近代工業社会を通じてあまねく普遍妥当性を主張していた限りにおいて、絶対主義的であった。キリスト教のような、しつこく改宗を迫る宗教の一つのようにして、それは自らを唯一真なる政治体系であると主張していた。つまりその主張するところによれば、他のあらゆる体系——例えば民主主義——は、払拭されねばならず、万人が自らの教義に従わねばならないとされていた。——以上が「絶対主義的」という言葉の意味するところである。

さて、そうだとすれば、いわゆる「アングロ・サクソン覇権主義」の考え方は、かつてそれが支配的であった時には、絶対主義といちゃついていたと言えよう。今日、主要なアングロ・サクソンの国々では、そのような類いの考えはすっかり霧散してしまった。ラドヤード・キプリングの帝国主義は、我々全員にとって今では限りなく縁の薄いものである。

かつての古臭い好戦的愛国主義、あるいは「アングロ・サクソン覇権主義」の考えや帝国主義に何が起こったかと言えば、思うに、これらの類いの感情は総じて、それよりは薄められたかたちの国際的な理念——「国際連盟」のような理念——へとある意味で融合してしまった。この組織体は、秘密裏に一つの帝国を作り出そうとする中で、「共産主義シンパ」たちもバツ

の悪そうな帝国主義者たちも包容していたのである。

世界社会主義風の感情を経験し、ある程度までそれに傾倒する中で、かつてのアングロ・サクソンの帝国主義者が、こうした（その広がりとともに暴力的な性格を失っていったとはいえロシアに端を発する）大規模なピンク色〔に薄められた共産主義〕の潮流に対して、どのくらいアングロ・サクソンの、それゆえ民主主義的な色合いを与えてきたのかを見積もるのは困難である。しかし民主主義がこのたびの「イデオロギーの」大戦を生き延び、それが終結して直後の時代を優位に過ごせるかどうかは、それまでにアングロ・サクソン人が世界潮流——次の平和が訪れた際にちょうどよい潮時を迎えることになる、社会を再調整しようとする大いなる意志——を、どの程度まで自らに固有の考え方で染め上げているかにかかっている。

もちろん「民主主義」という言葉はギリシア人に由来する。そして我々は長い間（人々がギリシア人についてずっと多くのことを知るようになるまで）我々自身の自由で民主主義的な制度は、この古代人たちの自由で民主主義的な理念を模範としているのだと思い込んでいた。後に我々は、古代ギリシアの自由が「ごく少数のための自由」しか意味していないことを学んだ。それはどちらかといえばマグナ・カルタの本当の意味が広く人々に気づかれるようになったことと似ている。かつて人々はそれがイギリス人の自由を保証するものだと思えぬ思い込まされてきた。最終的に我々は次のように説明された——おそらく暴露されたい者もいよう——、すなわちマグナ・カルタとは王の権力を有力な封建貴族たちへと切り分けたに過ぎなかったのだ、と。イングランドの一般人の自由は、結果として多くなるよりもむしろ少なくなったのである。そして十七世紀のいわゆる「フランス革命」も同じカラクリの寡頭制の反乱一揆であった。それは民衆の勝利ではなく特権階級の勝利だったのだ。

しかしつまるところ、アングロ・サクソン風の民主主義もまた、このたびの戦争より以前、特に1914年から1918年にかけての戦争より以前に知られていたものについては、おそらく我々が認識している以上に古代ギリシアの政治類型に——つまりアテナイ人の民主主義に——近かったのである。

ギリシアの都市国家における古典古代の「民主主義者」とは、奴隷所有という広大な基盤上の牧歌的な「自由」という身分において維持された支配集団の一員であった。それは多数を犠牲にして成り立つ少数の生活事例だったのである。そしてこの多数とは、たんに少数が征服し奴隷化した人々であった。

しかし十九世紀の、パブリック・スクール風の、好戦的民主主義であっても、全く異なる条件を仮定していた訳ではない。十九世紀のブリトン人とは「民主主義的な」専制君主だったのであり、多くの現住民——インド人であれ、アフリカ人であれ、（そしてあえて認めねばなら

ないが) アイルランド人であれ——、あるいは農奴の身分でアイルランド人と一緒くたにされる他なかった「特権を持たない」イギリス人を支配していたのである。

これら従属的な人々が売買されていないという意味では奴隷でなかったのは事実である。しか建前上は平等な「市民」だったとはいえ、実際にはヴィクトリア女王の〔古代ギリシアの〕都市国家や古代ローマ、ビザンチン帝国の狭い範囲に集められるのではなく地球全土に分散させられた) 奴婢であった。帝国——当時考えられていたような——は、アテナイの民主主義に似ていなくもない政治的な見取り図を提供しており、アテナイのペラスゴイ人⁷からなる奴隷人口に相当する類いの人々、すなわち——インドにおいてはシャヒーブ⁸ではない者、アフリカにおいては白人ではない者すべてからなる——使用人階級もしくは「黒んぼ」たちがいたのである。

さて、先に述べたことだが、すでにここ長きにわたって大半のイギリス人はこうした体系を拒絶し、こうした類いの帝国主義と関わりを持つことを日に日に望まなくなってきた。彼らは自身の民主主義を——事実上でなくとも理屈として、あるいは感情面では——すでに純化してしまった。家庭内や海外にいる彼らの半奴隷について、彼らは長いこと腹立たしく感じていた。特に気づかれることなく、彼らはかつての好戦的なタイプの民主主義を何か別のものへと変容させてきた、あるいは変容させようとしてきたのである。

英国の人々は、あの素晴らしい本能を、久しく少数の特権であった自由と正義にも適用し、この特権がますます多くの、あらゆる人種の人間たちによって共有されるようにした。しかし彼らは——この特権を拡大して大衆化しようと試みると同時に——自身の生得権として、自身の天命として理解していたもの、つまり自由を享受すること、自由を他の者たちにも教えること、を止めはしなかった。彼らは、もしそうしなくてすむのなら、これを水で薄めるようなことはしなかつたろう。彼らはいっそうの自由を世界に求める。つまり彼らが求めるのは、[一人あたり]同じだけの自由ではなく、さらに薄く引き伸ばされたがゆえにいっそう広く行き渡った自由である。

おおよそ以上が今日の状況であり、物事のありようについてである。自由を教えるためにその未来の生徒をまず奴隷にするというように、その方法がどんなにか逆説的に見えるに違いないとしても、また自由への愛着を独占する人々のふりをするアングロ・サクソン流の見せかけを一笑に付すことがどんなにか容易いことだとしても、そしてある点では我々がどれほど支離滅裂であるかも知れないとしても、それでもなおアングロ・サクソン人を知り合いに持つ人であれば誰であれ、その精神のある程度の公平さ、忍耐力、行き過ぎた不正に対する敏感さ(その問題となっている不正の責めを負うべきなのが彼自身である時ですら!)、「他の連中」の立場にも向ける他に例を見ないほどの敬意、を否定することはないだろう。

以降の章立て

第七章 何であれ自由を掲げるものは民主主義に分類されるのか

第八章 ファシストの類型

第二部 ファシズムはいかにして始まるのか

第一章 領土においてではなく書籍の内に探求されるべきファシズムの根源

第二章 ファシズムの父

第三章 アクションへのカルト信仰と権力へのカルト信仰

第三部 シーパワーと普遍主義

第一章 領土 vs 波

第二章 シーパワーについての新しい考え方

第三章 普遍主義と国家主義

第四章 普遍主義的な見取り図における人種と階級

結論

訳註

- 1 イエスが山の上で弟子たちと群衆に語った「狭き門より入れ」や「汝の敵を愛せよ」など、最も有名な講話。
- 2 古代中東で崇拜された神。映画『メトロポリス』（1927年）で労働者たちを飲み込む工業機械＝怪物の姿で描かれているように人身供犠が行なわれたことで知られる。
- 3 サバト。キリスト教ではイエスが復活した日として日曜日があてられる。
- 4 ドイツが第二次世界大戦中に使用した急降下爆撃機の愛称。
- 5 中世イングランドの神学者ウィカムのウィリアムの言葉とされ、ウィリアムが創設したオクスフォード大学ニュー・カレッジや、彼が開校した史上初のパブリック・スクールであるウィンチェスター・カレッジのモットーにもなっている。
- 6 議論する相手の地位、性格、境遇に乗じて論を組み立てる人のこと。
- 7 ギリシアの古代先住民族。初めエーゲ海周辺に住んでいたらしいが、青銅器時代のギリシア語諸族の侵入によって土地を追われた。
- 8 植民地時代のインドで用いられた「閣下」、「ご主人様」に相当する尊称。